

詩歌・小説の中のはきもの (第18回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

167 薬師堂・天神の御社など拝みて、その日は暮れぬ。なほ、松島・塩竈の所々、画に書いて贈る。かつ、紺の染緒付けたる草鞋二足^{はなむけ}銭す。さればこそ、風流のしれ者、ここに至りてその^{まこと}実を顕す。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

松尾芭蕉

★『おくのほそ道 (穎原退蔵訳注)』から。宮城野に住む画工加右衛門は道案内の絵画と二足の草鞋を芭蕉に贈った。あやめ草を思わせるあざやかな紺の鼻緒を結び、邪気を払って、彼は絵図を頼りに出発した。この他に仙台名産の干飯一袋と海苔一包も貰っている。貰った草履は切緒草履といって紐を短く結んで余りを切り捨て、紺の染緒をつけた洒落たものだった。

168 夏の主役はサンダル。軽やかで、涼しくて。スニーカーも、インディアン・モカシンも下駄も、私の大好きな夏の^{はきもの}靴。

でも、きちんとした上等の革の靴を、ひも靴やヒールパンプスを、陽焼けした素足にはくのが、今、とても新鮮。

このはきこなしは、今までのサンダルやスニーカーをはく気分とは、ちょっと違う。この微妙な違いを、どう言葉にすればよいのだろう。ラフなのだが、思い切りラフではなく、ほんの少し緊張感があり、ちょっと贅沢な気分。洗練されたラフさ。そう、大人の女の、余裕のあるラフな匂い。

高田喜佐

★『素足が好き』の「自分らしく生きたい」から。私はこの十数年、香料会社の友人からその会社の作成している小さな匂袋の付いた手帳を頂き、使用している。長女が幼いころ、対象に近づけた鼻をフガフガさせると匂いがよく分かると教え、妻に叱られたことがあるくらいの香りマニアである。先日溜池の坂道で、向こうから降り下ってくる小柄な女性がいた。そこはかとなき匂いを漂わせた女性だなと感じつつすれ違って、先の外務大臣と気づいた。高田さんには何度もお目にかかっているが、その都度“匂い立つ”という印象を受けた。この一文を読んで初めて“匂い”を意識してる女性なのだと知った。

169 白靴を脱ぎ捨てて駆く渚まで

伊藤和枝

白靴や灯台までを磯伝ひ

宮本啓子

白靴に踏む浜砂の曇りたる

内藤吐天

九十九里浜に白靴提げて立つ

西東三鬼

白靴に岩礁はしる潮耀りぬ

飯田蛇笏

★こうして五句を並べてみると、海には白靴が似合うようだ。ただ、俳句には“季語”というきまりがあって、最近では余り履かれなくなった白靴なのに、季語にあるから大家も素人も相変わらず白靴白靴と白靴ばかり詠む。これも近頃流行ってはいないが、

メッシュはどうかと句集を何冊も調べてみたが、ただの一句も見つけられなかった。短歌においても事情は同じ、メッシュに詩情が湧かないのは頭が“定型”になっているかららしい。

170 母の若い頃は、本降りならば高めの足駄、小降りになってお昼頃には上がるかなと思えば歯の低い日和下駄で出かける。どちらも普通の下駄より歯の厚みが薄いから減り方も早い。砂利道を歩けば歯はどんどん減って、歯の両側にめくれ返った木が食い出してくる。雨の上った晴れ間に急いで泥を洗い、切出し小刀でめくれた部分をせっせとこそげ落として平らにする。この次履く時に足元がしっかりしているように手入れしておくのだ。

青木 玉

★『幸田 文の箆笥の引き出し』から。母親の文はその父露伴の厳しい躰の下で育った。雑巾がけひとつでもおろそかにすることは許されなかった。そのお陰で私たちは文を通して、下駄の履き方から手入れの仕方まで事細かに教わることができる。今、稀に下駄に関する書籍はあっても、履き方や手入れまで丸ごと記したものはほとんどないといってもいいから貴重である。

171 中納言の阿闍利とともに、廣博にして大きな殿に行き合ひて閑談を遂ぐ。其の御傍に一人の童子有りて、成弁をして真言を教へしめ給ふと云々。成弁、仮染に外へ出でむと欲す。阿闍利、一足の足駄を持ちて成弁に与へり。其の足駄之緒、左右乍らあれども、たゆみてよわげなりと云々。

案じて云はく、前の度の京上之時、渡辺に於いて見し所の片足之緒の切れたるをすげて、大明神、之を給ふ也、然りとはいへども、はじめかたなれば、よわげなり。

明恵上人

★『明恵上人夢記（久保田 淳他校注）』から。成弁は明恵が自称していた名前。渡辺は摂津の源氏渡辺党（渡辺綱がいた）の土地。中世の人々は夢を啓示として受け取っていたので大切なものであった。足駄やその鼻緒のことが何故夢にでてきたか分からないが、連日夢をみているのは興味深いことである。脳が活性化しているとき、人はよく夢を見るという。

172 子供には、靴よりも下駄をと申しました。自分の指を私に見せて、こんな足に子供のを致したくないと申しました。

小泉節子

★『天の川幻想 小泉八雲』から。八雲は、着物の下からチラチラ見える白足袋が好きで、節子夫人に子供にも白足袋を履かせるよう命じた。自分は兵隊靴を履き、「日本の労働者の足は、西洋人のよりも美しい」と言っていたという。

173 砂漠のなかを苦勞しながら進んでいくエイミーの足さきと脚、彼女はらんぼうに靴を脱ぎ、それを砂漠に置いていく。

兵士たちは砂漠のなかへ進んでいく。そのあとから部隊を追う女たちが見える。彼女はついに女たちに追いつき、いっしょになって砂漠を歩いていく。外人部隊のラッパの響きがゆっくり消えていき、砂漠に吹きすさぶ風の音がはっきり聞こえてくる。フェイド・アウト。

—おわり—

ジュール・ファーズマン

★映画『モロッコ（佐藤和夫訳）』。兵士トム・ブラウン（ゲイリー・クーパー）を追う歌手エイミー・ジョリー（マレーネ・ディートリッヒ）のラスト・シーン。この語り草になっている名場面に現われた靴は映画史上もっとも有名な靴である。私は日本モロッコ協会の監事をしているが、『カサブランカ』（主演ハンフリー・ボガート

／イングリッド・バーグマン) もこの映画もモロッコの人には極めて評判が悪い。外人部隊など明らかにならず者たちからなる侵略軍であるし、過去を捨てたり過去に傷ついた得体の知れない連中がモロッコに乗り込んで来て、愛だの恋だのと勝手なことをしていたのだから、そんな映画をモロッコ人が楽しめないのは当然である。

174 ローマ人の採用した、コルクの三番目の利用法は、靴底に入れるということであった。とくに冬期に水から足を守るために靴の中にコルクを入れた。また、当時はハイヒールが知られていなかったもので、本来の背の高さよりも、もっと高く見せたかった婦人たちが踵の下にコルクを大量に入れたのであった。

ヨハン・ベックマン

★『西洋事物起源』から。工場見学者に靴底に樹脂で練ったコルクを塗りこむ作業を見せて、何を詰めているかわかりますか？とたずねると、正解者がほとんどいない。モロッコに行って、この樹の名前を知っていますか？と現地ガイドに質問されて、その場にいた十数人の日本人旅行者は、一人もコルクの木と答えられなかった。ところで、靴底にコルクを入れるのは軽さを出すためとばかり思っていた。「水から足を守る」効用もあったとは！世の中知らないことが多い。

175 歩け 歩け 歩け歩け
南へ 北へ 歩け歩け
東へ 西へ 歩け歩け
路ある道も 歩け歩け
路なき道も 歩け歩け

高村光太郎

★四番まである『歩くうた 作曲 飯田信夫』の一番。昭和十八年に流行した国民体力増進運動のための国民歌謡。「歩け歩け運動」が提唱され、主として学生が標的に

された。体位向上はタテマエで、実際は輸送力の低下での混雑を防止するのがホンネだったようだ。「乗らないで歩けば靴の底が減り 野田錦魚」、靴屋から見るとこの運動は迷惑なものだった。張かえ用の底革すらなかったのだ。

176 「こっちのサンダルになさい」
「でもバンドの方がいいもん」・・・
「いいでしょう、パパ」

母と争って履いてきたバンドでとめる型のパンプスを、久美子は足をあげて見せた。バンドが交叉する足の中央には花飾りがついている。赤ん坊だと思っていた娘が、お洒落をする年齢になったことが無気味だった。

渡辺淳一

★『リラ冷えの街』から。女の子が女らしくなくなっていくのは父親にとっては、うれしい反面、いささか無気味なものでもある。ある日突然、玄関に娘が初めて履くハイヒールが置いてあるのを見たとき、落ち着いた気持ちになり、あわてて目をそらした記憶がよみがえった。